

## 近代日本モダニズム芸術とファッションについての研究

——1910年代－1930年代を中心に

Modernism and Fashion in Japan 1910s -1930s

五十殿利治\*1+, 滝沢恭司\*2+, 鈴木貴宇\*3+, 喜多孝臣\*4+, 江口みなみ\*5+

Toshiharu Omuka\*1+, Kyoji Takizawa\*2+, Takane Suzuki\*3+, Takaomi Kita\*4+, Minami Eguchi\*5+

\*1 筑波大学大学院人間総合科学研究科 茨城県つくば市天王台 1-1-1

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba,

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, Japan

\*2 町田市立国際版画美術館

Machida City Museum of Graphic Arts

\*3 早稲田大学教育学部

Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University

\*4 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

Doctoral Program, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

\*5 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程

Doctoral Program, Graduate School of Comprehensive Sciences, University of Tsukuba

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The present study is to examine the image of “Artist” in modern Japan, an image which was different from traditional literati and imported from West just like the Art itself. Late Meiji and early Taisho period saw a surge of modernism in art and literature in Japan and special attention is paid to the significance of artists’ fashion including “nude”. Major modernists in the 1920s and the 1930s such as Ryusei Kishida, Kaita Murayama, Kyojiro Hagiwara, Tomoyoshi Murayama and so on were multi-talented and transcended traditional boundaries of genres of arts and some of them attracted public attention for their fashion and thus were widely publicized as a fashion leader. These no doubt contributed to the formation of the general image of “Artist”. Our purpose is to investigate modern fashion in terms of general art(s) history, taking into consideration western original models and its transformations in modern Japan, its reception of general public and so on.

### 研究目的

「美術」という概念が「書画」や「彫物」とは異なる近代の所産であったように、「美術家」のイメージも「文人」とは異なるものとして近代に成立したものであり、「美術」と分かちがたく、広く社会に流布している。本研究は明治末・大正初頭以後の日本におけるモダニズム芸術、とりわけ美術と文学を中心にして、「裸

---

\*1) Omuka@geijutsu.tsukuba.ac.jp

体」を含む芸術家のファッションが帯びた芸術的意義を検討することを目的としている。とくに昭和戦前期までの時代に着目するのは、明治末・大正初頭から、岸田劉生、村山槐多から萩原恭次郎、村山知義までモダニズムの洗礼を受けた作家にはマルチな才能をジャンルを横断して発揮するものが少なくなかったからである。「ファッション・リーダー」としてジャーナリズムによって喧伝される場合さえあった。つまり、その芸術活動のスタイルが一般の「芸術家像」の形成のみならず、時代の突端に立つ者(つまりアヴァンギャルド)というイメージの形成に大きく関与したと考えられるのである。

## 研究活動と成果

本年度は4回の研究会を開催した。平成23年6月18日筑波大学において、研究計画に基づいて、川畑直道氏(デザイン史研究者、グラフィックデザイナー)とともに研究会を開催した。共同研究員江口みなみがドイツ・ワイマールでのデザイン史学会において行った発表を基にして、バウハウスに学んだ山脇道子について話題提供を行った。江口の発表は、日本からニューヨークを経由してバウハウス、そして帰国という各段階における山脇のファッションを子細に検討して、そこに美術家・デザイナーとしての成長の跡を探るものであった。研究会では生前の山脇道子と親しく接したこともある川畑氏から山脇道子のみならず、バウハウス学生の生活等についてのコメントがあった。とりわけ、帰国後の山脇道子の存在は、資生堂の個展などを通して、大きな影響力があり、本研究にとって重要な事象と位置づけることができる。

つぎに10月1日に、筑波大学において、現代美術家のやなぎみわ氏とともに研究会を開催した。やなぎ氏は昨年8月京都国立近代美術館において築地小劇場に着目した三部作による演劇活動を開始したところであり、本研究の主要な研究対象である村山知義に関心を寄せている。研究会においては、氏の視点からドイツ留学後に築地小劇場を開設した土方与志を中心にして話題提供があった。氏の参加により、本研究の課題がもつべき現代性という側面が自ずと浮かび上がることになった。

ついで、11月13日には、筑波大学において、日本美術研究者クリスティン・グース氏 Dr. Christine Guth (Tutor, Royal College of Arts) とともに研究会を開催した。グース氏の話提供は、Transnational Perspectives on Fashion 1880s-1920s と題したものであり、日本美術愛好者として知られるボストンのイザベラ・ガードナーのファッションへの並々ならぬ関心について論じるとともに、最近発掘した資料の一部とともに、大震災後に来日したデニシオン舞踊団のダンサーについて言及した。とくに、これまで研究会では話題とならなかったコレクターという存在に着目するものとして、活発な議論がなされた。

第4回目として、12月17日に、筑波大学において、山口恵理子氏(筑波大学准教授)と齊藤祐子氏(近代日本彫刻史研究者)を迎えて研究会を行った。イギリス美術史に造詣が深い山口氏はラファエロ前派と明治美術との深い関わりについてファッションを視点にすえて、一方齊藤氏は村山知義とも関わりがあった彫刻家萩島安二とマネキンとの関係について、それぞれ興味深い話題提供を行った。近代日本における美術家や文学者にとって、海外の尖端的な現象は絶えず参照すべき枠組みとして機能したが、ヨーロッパの「過去」(たとえば中世主義)もまたそれとともに刺激を与えたことは見逃せない。また、ファッションと不即不離の関係にあるマネキンは美術家にとっては、人形の問題とともに、重要な研究対象として存在していることを再認識することになった。

その他の研究成果として、江口みなみがドイツのワイマールで開催されたデザイン史学会(Gesellschaft für Designgeschichte)の第四回年次大会「自己と他者:トランス・カルチャーのデザイン」(平成23年5月7日、バウハウス大学)において発表した独文によるペーパー「Von einem japanischen Moga zur Neuen Frau. Wandel in Stil und Mode am Beispiel der Bauhäuslerin Mityiko Yamawaki」を挙げるができる。